

上部旧石器時代遺跡の研究 ―遺跡構造論とその周辺―

吉川 耕太郎*

はじめに

1949年の群馬県岩宿遺跡の発掘調査から半世紀が過ぎた。日本において上部旧石器時代の研究は数多くの成果をこれまでに残しているが、21世紀を迎えた現在、研究はどのように進展しているだろうか。

本稿では、これまでの上部旧石器時代研究のうち、遺跡研究史を中心に概観しながら、その成果とともに、そこに内在する問題点を抽出し、今後の研究の方向性を模索したい。

1. 旧石器時代研究の幕開け―岩宿の発見―

在野の考古学者相沢忠洋によって発見された岩宿遺跡は、1949年、明治大学考古学研究室によって発掘調査された。日本における旧石器時代研究の端緒となったこの調査では、今後の研究に重要な視^(註1)点のほぼすべてが提示されている。

まず、第1に文化層の認識である。岩宿遺跡では時期の異なる石器群が層位的上下関係をもって検出され、それぞれ第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ?文化層と名付けられた。第2に石材の区別であり、石材差は時期的な差に起因するのではないかと推測されている。第3に、石器の素材・製作技術・形態の識別である。これは『原史学序論』に示された「原料・製法・形象・用途」の概念を用いたものである。^(註2)第4に、石器集中部や礫群・炭化物集中部の認識である。石器は遺跡にまんべんなく分布するのではなく、粗密や空白部をもっていることが、この段階ですでに指摘されている。ただし、岩宿遺跡の報告に石器の分布図はみられない。本稿に関わるのは、この4つめの指摘である。

石器が空間的にまとまりをもって出土することは、千葉県丸山遺跡、東京都茂呂遺跡、新潟県神山遺跡、^(註5)同貝坂遺跡^(註6)においても指摘され、居住や石器製作の場として推測されてきた。丸山遺跡では、「石器の製造が行われたことは間違いない。(略)住居を別の地点に考えることは許されないと思う。このような文化の時代の段階においては、(略)生活址即製作址とすべき」との指摘がなされている。さらには、「生活の資料はきわめて貧弱であり、(略)おそらくかれらの集団は小さく、住居の期間は短かったであろう。(略)これがこの時期の石器文化における常態なのか、より大規模の生活の断片として残されたものであるかの分析は今のところそれを明瞭にすることができない。」と述べられている。神山遺跡では、石器の分布状態について、3つの独立した分布区域を認め、それらが不整円形に近く、遺物が二次的移動を被っているとは考えられないことから、当時の住居と強く関連するものであることが指摘されている。

こうした石器集中部についての認識と解釈はなされるものの、当時の主流は個別「石器群」の編年・型式論的研究にあり、遺跡や石器集中部の性格・機能について確たる分析方法が提示されるまでに至らなかった。

* 秋田県埋蔵文化財センター中央調査課文化財主事

2. 遺跡研究の2つの視点

1970年代前後になると全国的に大規模な開発がはじまり、これに伴って発掘調査も面積・深度ともに広く深くなされるようになった。その1つに神奈川県月見野遺跡群^(註7)がある。月見野遺跡群は合計17カ所の遺跡が黒目川流域の約2kmに連綿と連なる遺跡群である。この調査において、石器が集中して分布する範囲は「ブロック」と呼称され、後述するように、流域を一つの生活領域としたムラのあり方が唱えられた。^(註8)

一方、東京都野川遺跡では、石器集中部を「ユニット」と呼称し、「セトルメント・パターン」論^(註9)が展開された。

厚く堆積する関東ローム層中における複数の文化層の検出は、層位的裏付けをもって編年研究を押し進めることとなった。また、広範囲の調査からは、遺跡から生活の場を復元しようという試みがなされるようになった。それは「石器群」分析から「遺跡」分析へと、具体的な方法を持って駒が進められる第一歩となった。

①「セトルメント・パターン」論の展開

野川遺跡の調査では、各ユニットを石器組成から類型化することにより、遺跡における複数の「場の機能」を推定し、そこに行動パターンを見出そうとする「セトルメント・パターン」的視点^(註10)が展開された。アメリカにおけるセトルメント・アーケオロジーを導入したものである。

具体的な手法は、石器組成を検討し、ユニットの類型化から「幾つかの種類の石器製作の場」や「特定の器種の製作の場」、「特定の行動に関連する場」など、A～F型までの行動パターンを想定するというものであった。そのようにある行動パターンが想定されるユニットと礫群・配石との関係から、遺跡の中でのセトルメントの時期的変遷が示された(第1図)。また、そこでは「広場」も想定されている。野川流域にみられる遺跡群を、以上の視点で捉える必要性を唱え、「遺跡の型式」として、①Base camp、②Season camp・Work camp、③Transit siteを把握すべきであることが提案される。遺跡相互のセトルメント・パターンの把握、そして「一田地一時期のコミュニティパターンへの理解」^(註11)がその目的にはあった。

②遺跡の構造研究

野川遺跡の調査に先立って、埼玉県では砂川遺跡の調査が行われた。^(註12)第1次調査では、石器群を石器製作作業の1つの単位である個体毎に分類し、あわせて個体単位での平面分布も検討された。A地点には3カ所の石器集中部がみられる。同一個体は基本的に、1つの石器集中部に偏って分布するが、ナイフ形石器などの製品はほかの同一個体とは離れた場所に分布する傾向にあることが認められた。そこで、「使われる道具は製作された場所を離れて動く」という指摘がなされたのである。そして、それら石器集中部の「どこが石器製作址であり、またどこが生活の中心だと断定する必要はないだろう。(略)石器の製作も生活の一部であった先土器時代にあつて、居住生活の場所がすなわち石器製作の場所であり、石器製作の場所の近くが居住生活の中心の場所であったという、ごくありふれた小さな遺跡の構造あるいは機能の実態を示しているものと理解すべきであろう。そしてそこに生活した人々は、まさに先土器時代における最小単位の間人集団であったと推測される。」との遺跡に対する一つの見方が示される。

この分析の視点と方法は第2次調査に引き継がれ、個体別資料分析から遺跡内における「ブロック」

の形成過程が検討された。^(註13) 石器製作の最小単位である個体は「ブロック」内にとどまらず、「ブロック」間をまたがっていることが明らかとなり、その軌跡を復元することに成功した。さらに、一個体に対する石器製作作業は遺跡内で完結するのではなく、遺跡をこえて他の遺跡とつながっていることが明らかとなった。^(註14) ここに、当時の集団は移動生活を営んでいたことが実証されたのである(第2図)。1970年代には、以上の2つの実践的方法論が示され、以後の旧石器時代遺跡研究に大きな影響を与える。より高次の解釈を目指す集落論はその一つで、1980年代に活発化する。

3. 集落論の展開

旧石器時代の遺跡は、一般的にはブロックや礫群・配石・炭化物集中部などから構成される。そうした資料から具体的に「集落」を復元する試みは、1980年代にはいって、鈴木忠司らを中心に行われた。その手法は以下の通りである。^(註15)

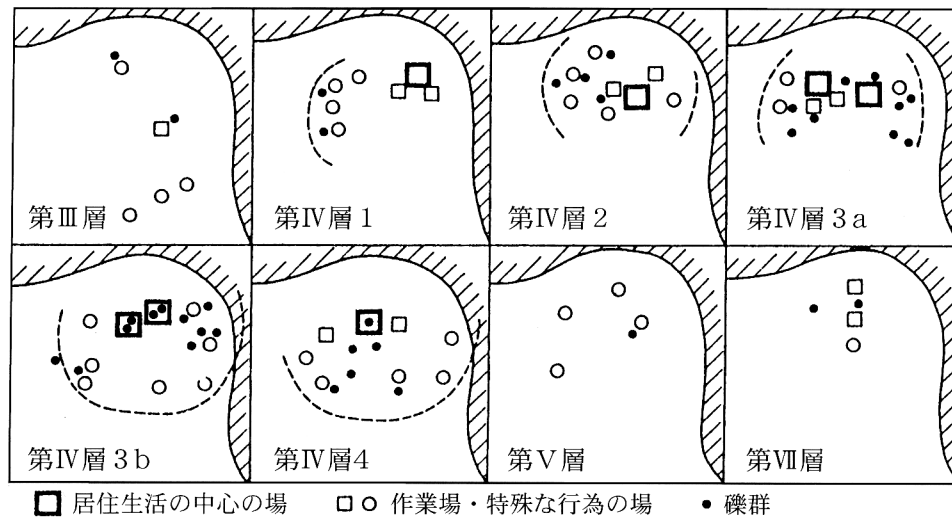
- ①景観論・・・集落の構成要素(遺物と遺構)の把握。つまり、どのような施設と場で成り立っているのかという、視覚的な景観を捉える。同一の個体を共有する石器ブロックのまとまりを「ユニット」として、礫群と組み合わせて「世帯」を設定。
- ②構造論・・・世帯ユニットと世帯ユニットとの関係(親戚関係など)を、個体の共有や接合関係などから把握。
- ③基盤論・・・集落の生計などに関する存立基盤を明らかにする。いいかえれば、当時の立地や周辺の生活環境の復元。

以上の方法により、静岡県寺谷遺跡^(註16)や、富山県野沢遺跡^(註17)、静岡県広野北遺跡^(註18)などを対象に、集落景観の復元が試みられた。寺谷遺跡では、個体の接合が北群・南群のそれぞれのユニットに収束し、各々に礫群や貯蔵穴とおもわれる施設をもつことから、合計2世帯が生活をともにした集落のあり方が想定された。また、野沢遺跡は、同様の分析方法により、3世帯が居住していた集落と想定され、寺谷と異なって、ユニット間でも接合関係が頻繁に認められることから、世帯間のより密接な関係が推測された。両者ともにユニット毎の「石器装備」を比較しており、比較的均質な生活活動を行っていたと考えられている。^(註19)

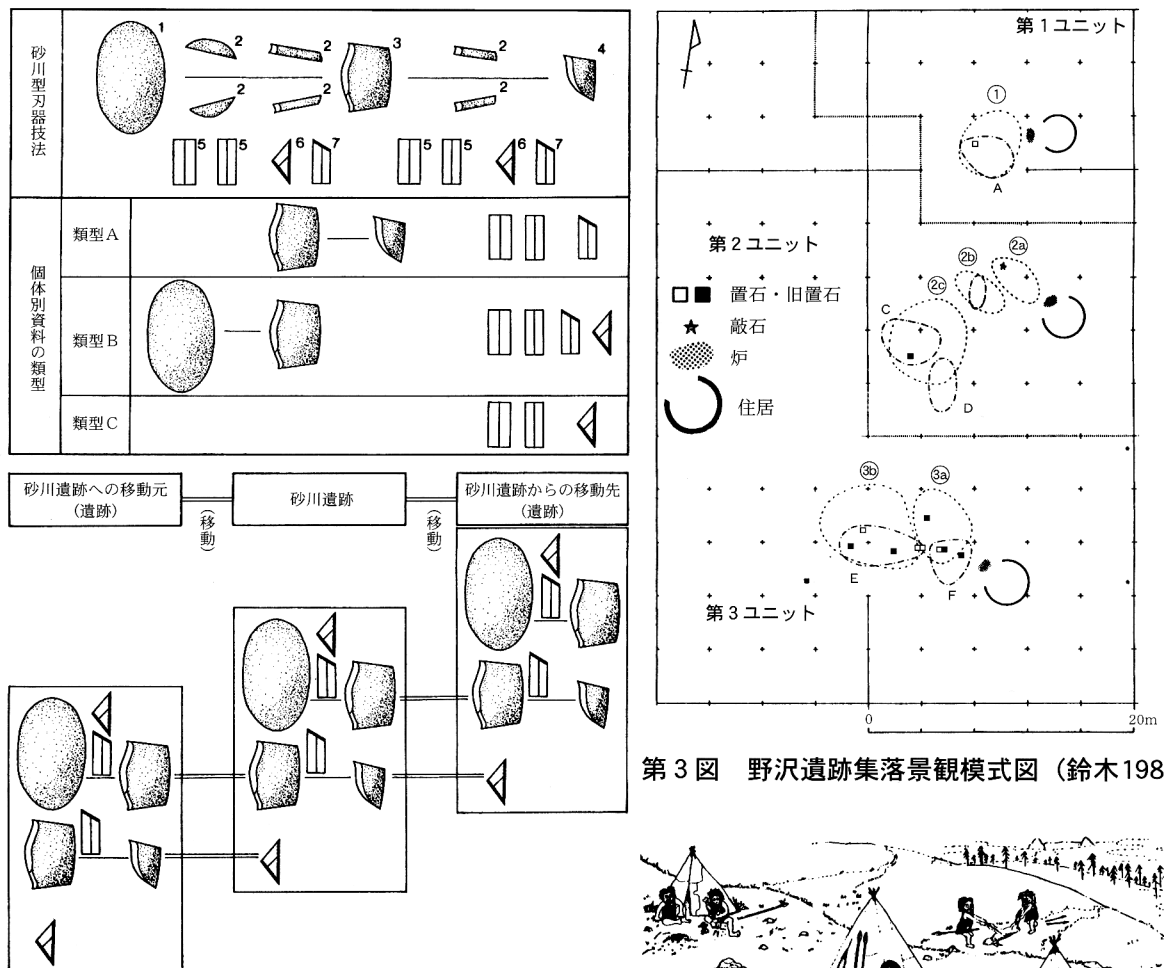
こうした集落論はつまるところ、生計をともにした世帯や、世帯間の関係を遺跡(=集落)のなかに見出そうとするものであった(第3・4図)。

大工原豊や須藤隆司は、1980年代以降の大規模発掘によって明らかとなった環状ブロック群について集落の復元を行い、その上で世帯や単位集団の抽出を試みた。^(註20) 大工原は群馬県のA T下位における環状ブロック群を分析し、3つの集落形態を抽出した。各々、「古城型単位集団集落」、「北山型単位集団集落」、「牛伏型集団群集落」と呼称している。須藤隆司は、環状ブロック群を環状集落として認識するために、個体別資料分析により、場の機能およびブロックの同時性などの検討を行い、「中央広場」の意義を見出した。

両氏ともに、世帯をユニットに措定し、その集まりとしての単位集団を把握した上で、集落間の関係にまで論及している。



第 1 図 野川遺跡の居住形態 (戸沢1984)



第 3 図 野沢遺跡集落景観模式図 (鈴木1988)

第 2 図 石器製作と集団の移動 (安蒜1988)



第 4 図 野沢遺跡集落景観想像図 (鈴木1988)

4. 「セトルメント・パターン」論と集落論の問題点

野川遺跡などで抽出された行動パターンは、「ユニット」毎の石器組成から推定されたものであった。しかし、石器の組成は、当時の集団がさまざまな活動を行い、それに伴ったモノの移動により結果的にその場に遺されたものである。遺跡内でも、石器原料としての石核や、製品としてのナイフ形石器は頻繁に移動しており、その軌跡が砂川遺跡の分析で示されている。つまり、ブロックにおける石器組成は、そこで活動に使われたすべての道具を示しているとは限らないのである。石器原料や製品の動きは遺跡の外へとつながっており、遺跡間のつながりを視野に入れた遺跡の形成過程を着実に把握することが第一に重要である。^(註21) ブロックを固定的に捉えるあり方はすでに矢島國雄により危惧されてお^(註22)り、安蒜政雄はブロックの流動性を砂川遺跡の詳細な分析を通して、具体的なかたちで明らかに^(註23)している。^(註24)

鈴木忠司らを中心として展開された集落論についてはどうであろうか。複数のブロックを接合関係や個体の共有関係からユニットとし、そこに「世帯」を想定し、遺跡は世帯が幾つか集まった「単位集団」の生活した場(集落)であるとする。その日常生活を営んだ集落は、「居住空間」や「作業空間」、「広場」などで構成される。こうした集落景観を導き出すために、接合関係を根拠として、ブロックの同時性を検証している。集落論は、いわば日常生活が営まれた場を復元し、そこで生計をともにした人々の単位(世帯→単位集団)を抽出することを目的としているといえよう。この点については一定の成果はあがっている。しかし、それはまた研究の停滞をも招いてしまうおそれがある。

まず、「セトルメント・パターン」論と同様、遺跡内における「場の機能」を推定する方法に飛躍がみられる。それはとりもなおさず、「ブロック」とは何かという点に集約されよう。それが廃棄された、いうなれば「ゴミ捨て場」であるのか、もしくは住居址であるのか、さまざまな見解があるが、^(註25)それを実証するのは困難である。当時の集団のさまざまな行為のすべてを復元することは、現時点の研究の現状からいってきわめて難しい。しかし、少なくとも石器群の遺され方から石器製作作業の内容を把握することはできよう。そこで「ブロック」を「石器製作作業の単位」としてみたらどうだろうか。そうすると、ブロックの形成過程やブロック間の石器製作作業上の関係が捉えられ、「遺跡の構造」を明らかにする第一歩となるであろう。

なぜ、ブロックや遺跡の形成過程を先に捉えることが重要であるのか。繰り返しになるが、旧石器時代遺跡には竪穴住居跡のような明確な掘り込みをもつ遺構はほとんど検出されず、あるのはブロックや礫群のみである。ブロックは、石器製作作業にともなう残滓と、その結果仕上げられる製品により構成されている。当然のことであるが、石器製作作業の行われる前には、その場には何もなかった(あったとしても推測不可能)。いいかえれば、石器製作作業をととして「遺跡」は徐々に形成されていくのである。そうした確実に捉えられる行為の復元、我々が対象とする「遺跡」そのものの「成り立ち」・「性格」を理解することこそが真っ先に取り組むべき仕事であり、その具体的な石器製作作業の単位としてブロックがある。当時の日常生活において、石器製作は生活の一部となっていたと考えられ、その営みの復元は移動生活のあり方や社会の復元にも密接につながってくるであろう。旧石器時代遺跡の研究には、石器組成のみならず、石器製作作業を媒介とした動きのある視点が必要である。その上で「セトルメント・パターン」論的視点が導入されるべきであることは、安蒜政雄により

すでに指摘されているところである。^(註26)

「研究の停滞」と先ほど述べたが、遺跡の中のどこが居住空間で、どこが調理空間で作業空間であるといったことを復元することにより、個々の集落を復元するとしても、その研究に発展性はあるのだろうか。仮に復元された集落がある一時の姿を表していたにしても、前述したように、遺跡は活動の累積として存在するのである。また、石器製作作業のあり方(石器原料や製品の搬出入)からは、遺跡は自己完結的に存在するのではなく、他の遺跡との関係の中で成り立っている。それは当時の集団が移動生活を営んでいたからにほかならない。こうした視点に立てば、個々の遺跡それのみで、即、集落景観の復元を目的とすること、そして、そうした事例をただひたすら積み重ねていくことには疑問を感じざるを得ない。そこで、先に見た須藤の論考では、こうした問題を克服すべく「先土器時代集落の歴史的な性格とは、一遺跡から把握される一集落内に存在するのではなく、移動生活の必然的なあり方として、集団が結合・分散した結果残された遺跡群の中に存在するのである」^(註27)との指摘があり、集落論に構造論的な視点が発展的に導入されている点で評価すべきであろう。

ところで、集落論のもう一つの要には集団関係についての問題がある。たとえば、生計をともにした最小単位の集団に「世帯」がある。それを「ブロック」にみるか、「ユニット(ブロック群)」にみるかでも様々な意見があり、遺跡を遺した集団の関係はどのようなものであったのかという点についても、これまでにいろいろな見方があった。^(註28)しかし、たとえば稲田孝司は、砂川遺跡の分析を通して、そうした議論に至るにはさらなる遺跡の慎重な検討が必要であることを示した。^(註29)

一連の集落論の展開によって、あたかも旧石器時代人の生活像が生き生きと描き出されたかに見える。しかし、こうしてみると問題はそう単純ではないことが明らかとなったであろう。

それでは、旧石器時代の生活や社会を復元するにはどうすべきか。

5. 「集落」と「ムラ」

ここで、遺跡からいかに当時の社会に近づけるかを考えるために、その作業概念ともいえる「集落」と「ムラ」について検討してみたい。まず、「集落」とは、住居・貯蔵施設・埋葬施設などの構成要素の集合体として捉えられる。^(註30)一方、「ムラ」とは血縁関係や一定の領域をもった「地縁関係」により生活の営まれた空間である。^(註31)この限りにおいて、遺跡は「集落」でもあり、「ムラ」でもあり得る。林謙作によると、その違いは分析概念による下位・上位の関係に由来するらしい。これは、縄文時代の遺跡において、遺構のあり方からある程度「集落」を復元するまでの分析が可能であるからこそいえるのであろう。^(註32)旧石器時代においてはどうか。

これまでにみてきたように、旧石器時代の「集落」を復元するには、さらなる慎重な分析が要求される。しかし、だからといって「ムラ」について何も言及できないというわけではない。戸沢充則は、砂川遺跡A地点の3つのブロックに3つの居住単位を考えることや、石器製作も生活の一面と考えることにより、どこが居住の場であったとか、住居の構造についてただちに結論付けるべきではないことを主張している。^(註33)むしろ、「最小単位の人間集団」の存在を推測することにより、モノや「ブロック」を動きのある形で捉えようと試みたのであった。そして、神奈川県月見野遺跡群の調査を通して次のようなことを述べている。

「一万年以上も前の先土器時代にも、すでに一つの谷を生活領域とするような、ある一定の人間の集団があったことを推測させるのであって、広い関東平野を少人数の人間が、放浪の生活を続けていたというようなイメージは、少なくともそこではわいてこない^(註34)」。

血縁関係・地縁関係をもった人々が生計を立てた「ムラ」のあり方を旧石器時代において考えるには、月見野遺跡群のような規模で考えなければならないと主張する。安蒜政雄は、ブロックに表象される「家族」、ユニットに表象される「小集団」を仮定し、それら移動生活をとるに幾つかの小集団の集まりとしての遺跡のあり方を捉え、その集まりとして「単位共同体」を想定し、「環状のムラ」・「川辺のムラ」といった二つのムラのあり方を考えた^(註35)(第5図)。

「集落」と「ムラ」といった相異なるアプローチにより、旧石器時代の遺跡は捉えられているが、研究においてその双方の見方が重要であることは当然であろう。戸沢・安蒜による月見野遺跡群・砂川遺跡の一連の研究が明らかにしたように、旧石器時代における遺跡は、内に閉ざされた空間ではなく、外へと向かう「開放系」としての空間構成だったのであり、その視点を欠いたところに遺跡研究の発展はないのではあるまいか。

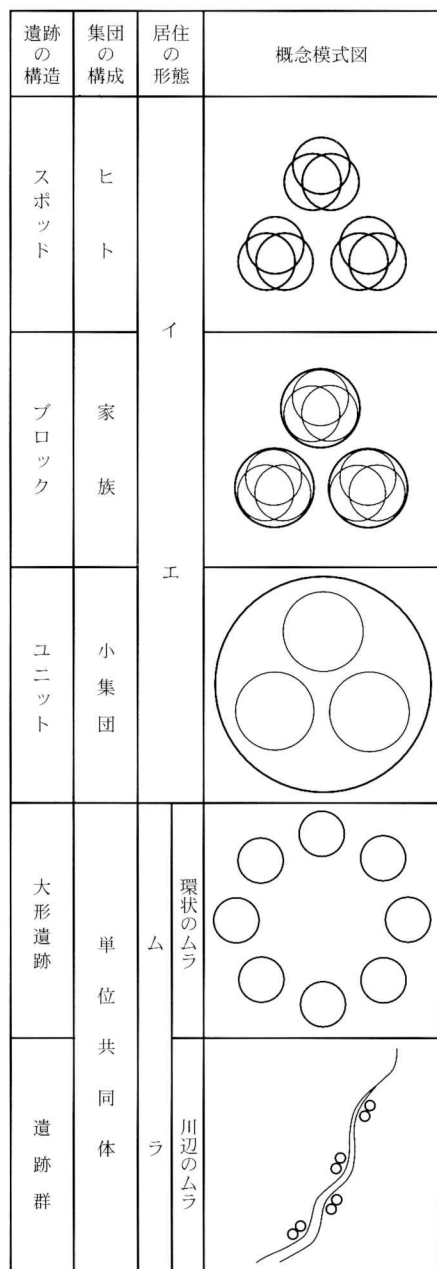
6. 遺跡群の構造から地域・社会の理解に向けて

さて、開放系を基軸とする遺跡各々は互いに関係性をもつ限りにおいて「遺跡群」を構成する。つまり、「ムラ」の概念でも明らかなように、遺跡研究は常に遺跡群研究の中で行われなければならないのである。「遺跡群」については、月見野以後、一定の解釈が与えられていたのは前にみた通りである。また、個々の遺跡を遺跡間の関係性―遺跡群のなかで位置づけていく試みは、「セトルメント・パターン」論と通ずるが、その手法に関する問題点は前述した。矢島國雄は、遺跡の構造研究からのアプローチにより、実体としての遺跡群の把握を提唱した^(註36)。ここでいう「遺跡群」は単なる見かけ上の分布的なまとまりではない。すなわち、石器製作作業の内容(原石の入手―消費、製品の使用―廃棄)からみた遺跡間連鎖の体系である。

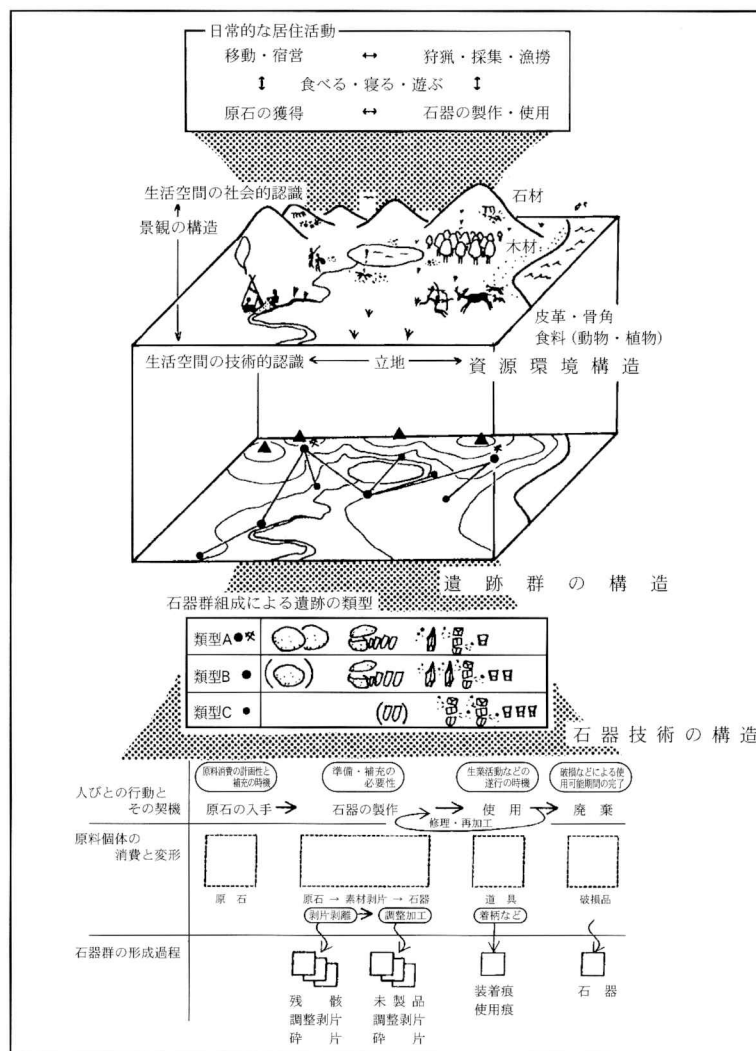
1980年代以降、こうした視点での事例研究が徐々に展開した。近畿地方では山口卓也により、サヌカイト原石産地周辺の遺跡と遠隔地遺跡の関係が明らかにされた^(註37)。南関東地方においても、島田和高原野口淳、吉川耕太郎、国武貞克などにより、各時期の「遺跡群」のあり方が論及されている^(註38)。

こうした状況をふまえて、野口淳は「編年研究などの対象は一遺跡ではなくむしろそうしたつながりを有する複数の遺跡＝遺跡群である」ことを指摘し、その分析を通して把握される「日常的な遊動生活」のなかでの諸活動(石器製作)と環境との関わりの総体を「居住構造」として概念化した^(註39)(第6図)。その具体的な実践は、相模野台地において相模野編年第Ⅱ期を軸として行われた。これはまた、「石器原料の消費過程と遺跡間連鎖の体系」の変遷過程の把握でもあった^(註40)(第7図)。佐藤宏之も「旧石器時代の居住形態があくまでも移動戦略にもとづくかぎり、適応・開発対象である生態との直接的関係性・連動性は基本」である^(註41)ことを指摘している。

現在、石器から遺跡へ、遺跡から遺跡群へ、遺跡群から地域へと視野を広げていくことにより、徐々に当時の集団の移動形態とその変遷が明らかにされつつある。しかし、こうした研究はまだ始まったばかりである。今後、「石器原料の消費過程と遺跡間連鎖の体系」にもとづいた上部旧石器時代



第5図 「ムラ」概念模式図
(安蒜1990)

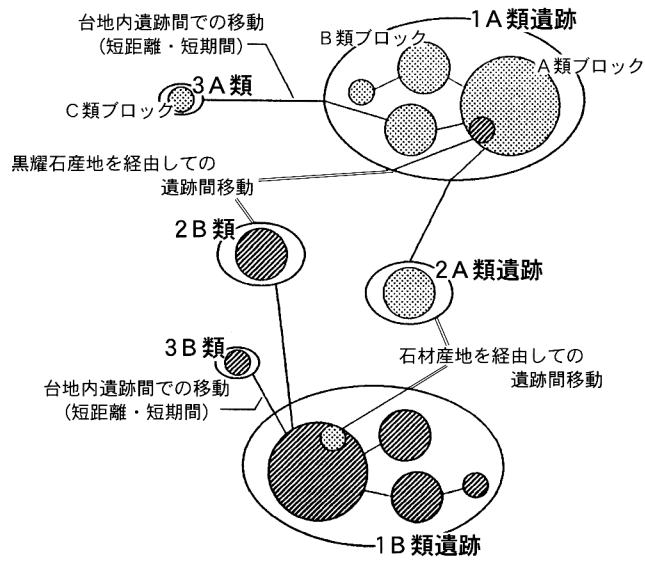


第6図 「居住構造」概念模式図(野口1996)

の時期的な枠組みの理解・把握とともに、日本列島における「地域」の相対化・再構成の試みが必要になると筆者は考える。

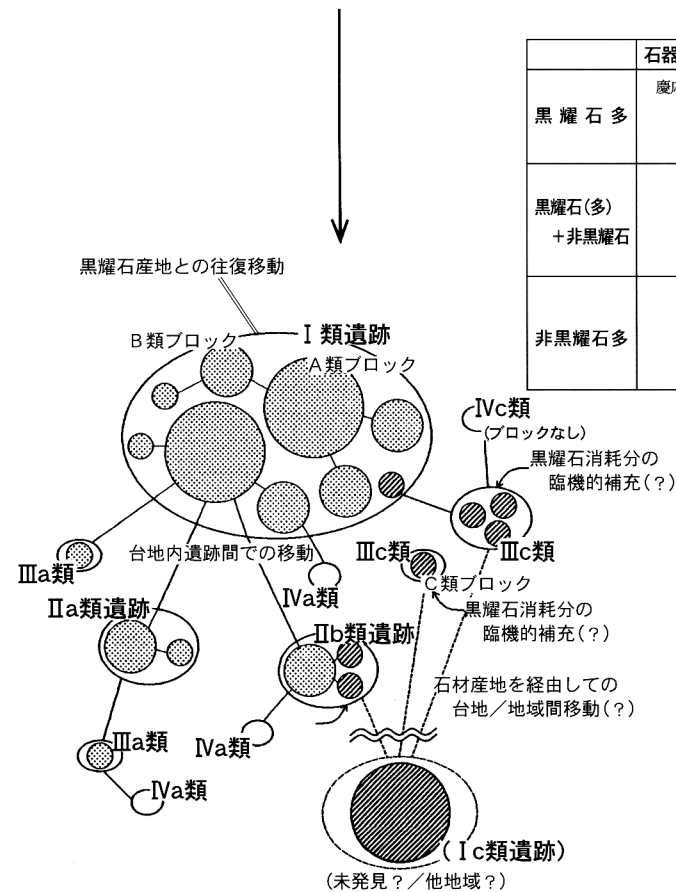
結語

筆者は、遺跡構造論的視点での研究がいまだ未知数の広がりをもつと考えている。当初は個別別資料分析によるブロックの形成過程の把握に始まったが、遺跡群・石材・石器原料の消費過程・集落・ムラなど、様々な分析概念を用いることにより、ミクロには遺跡内の構造の追求から、マクロには「地域」の構造とその変遷まで、遺跡構造論を基盤として、より多方面へ研究が分岐する可能性を秘



	石器製作大規模 ←	→ 石器製作小規模
A 群	上和田城山 4 次Ⅲ文	栗原中丸Ⅶ文 吉岡 C 区 B 4 中部上位 柏ヶ谷長ヲサⅫ文 代官山Ⅸ文
B 群	橋本Ⅵ文 吉岡 A 区 B 4 上面	台山Ⅳ文 吉岡 E 区 B 4 上部 根下Ⅲ文, Ⅳ文 上草柳第 2 地点 - B 3 月見野上野Ⅹ文 吉岡 B ~ D 区 B 4 上部 台山Ⅳ文 大和市 No.159 I 文 地藏坂Ⅶ文

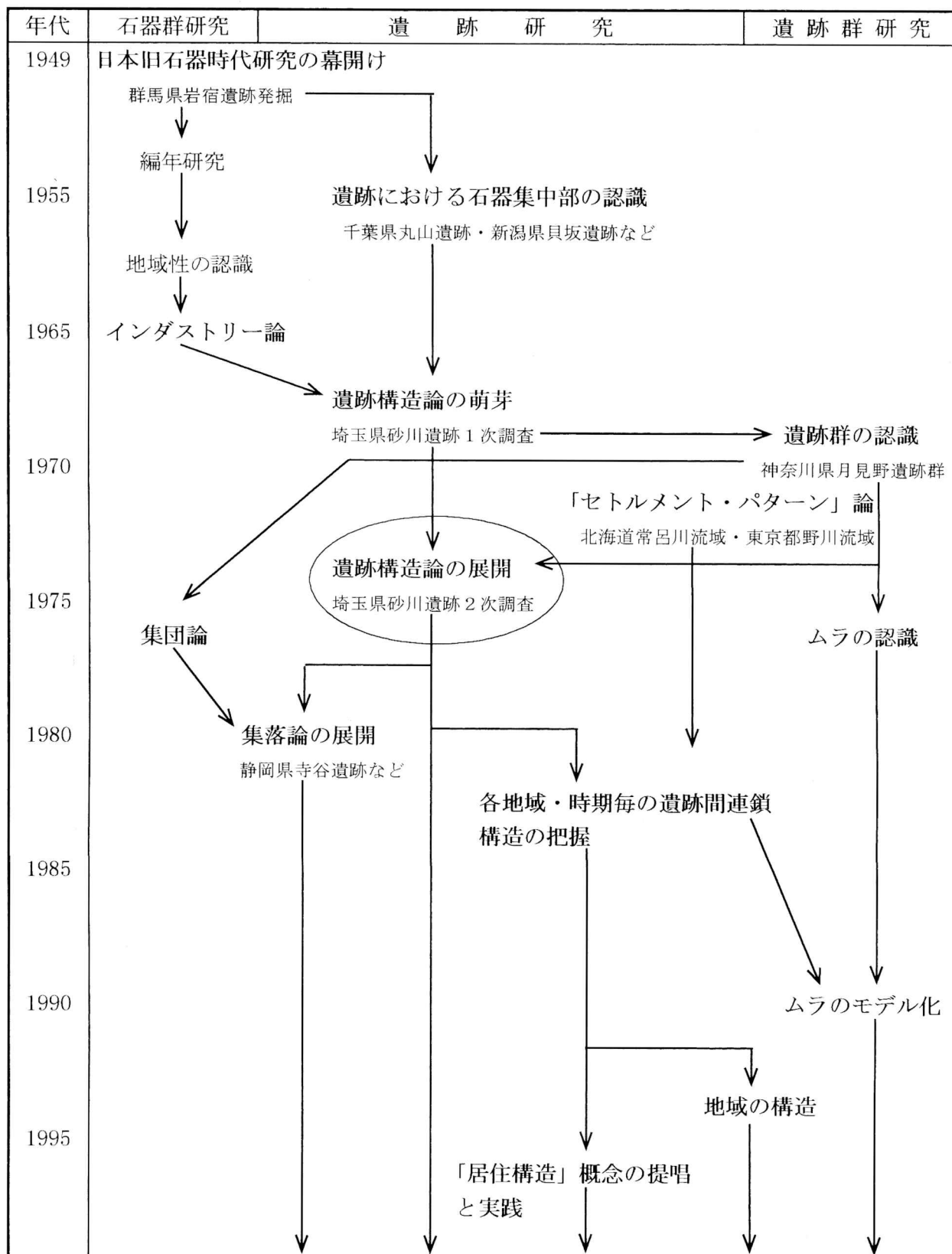
B4 上部～B3 中・下部段階



	石器製作大規模 ←	→ 石器製作小規模
黒耀石多	慶応 S F C V 文 橋本 V 文	月見野Ⅳ B 古淵 B 4 文 上土棚Ⅵ文 栗原中丸Ⅶ文 福田札ノ辻Ⅵ文 吉岡 C 区 L 3 地藏坂 V 文 上草柳第 2 地点 - L 3 地藏坂Ⅳ文
黒耀石(多) + 非黒耀石	寺尾Ⅵ文	上土棚Ⅵ文 地藏坂Ⅵ文 慶応 S F C V 文 柏ヶ谷長ヲサⅫ文 代官山Ⅸ文 高座渋谷団地Ⅵ文 早川天神森Ⅶ文 南鍛冶山 L 3・B 3
非黒耀石多		月見野上野ⅠⅩ文 吉岡 C 区 B 3 下部上面 地藏坂Ⅶ文 かしわ台駅前 V 文 本曾森野Ⅲ文 上和田城山 4 次Ⅱ文 高座渋谷団地Ⅶ文 根下Ⅱ文 長堀南 L 3

B3 中・下部～B2L 下部段階

第 7 図 相模野第Ⅱ期における遺跡のつながり変遷模式図 (矢島・野口ほか 1998)



第8図 遺跡構造論とその周辺の研究略史

めている(第8図)。さらに新しい分野の開拓のみならず、これまでの編年・型式論・文化系統論^(註44)などを再検討するための方法論的なみちすじが見通せるだろう。

本稿は1995年度に明治大学文学部に提出した卒業論文第1章の一部をもとに、明治大学大学院での考古学演習などを通して、大幅に訂正加筆したものである。卒業論文や考古学演習において、戸沢充則先生、安蒜政雄先生、阿部芳郎先生には、適切かつ多大なるご指導をいただいた。また、本論の主旨は矢島國雄先生、島田和高氏、野口淳氏、門内政広氏と交わした議論や御教示によるところが大きい。小林三郎先生はじめ明治大学考古学博物館および明治大学考古学研究室の学恩とあわせて、末筆ですが感謝の意を表したいと思います。

(付記)

本論では触れることはできなかったが、秋田県内の状況はどうであろうか。層位が良好でないこともあいまって、いまだ石器群の編年の整備が進められていないのが現状である。遺跡規模は1,000点をこえる大規模なものが多く、それ以外はナイフ形石器や石刃が単独出土する遺跡しかないというように、遺跡規模に大きな格差がある。時空間的な隔たりを埋める今後の新たな発見資料に期待をもちながら、調査方法も含めて、これまでの資料の慎重な再検討が急務である。

- 註1 杉原荘介 「群馬県岩宿発見の石器文化」 『明治大学文学部研究報告考古学』 第1冊 1956(昭和31)年
- 註2 杉原荘介 『原史学序論』 1946(昭和21)年
- 註3 杉原荘介・大塚初重 「常総台地における関東ローム層中の石器文化」 『駿台史学』 第5号 1955(昭和30)年
- 註4 杉原荘介・吉田 格・芹沢長介 「東京都茂呂における関東ローム層中の石器文化」 『駿台史学』 第9号 1959(昭和34)年
- 註5 芹沢長介・中村一明・麻生 優 『新潟県中魚沼郡津南町神山遺跡調査報告』 津南町教育委員会 1959(昭和34)年
- 註6 中村孝三郎・小林達雄 「新潟県中魚沼郡津南町貝坂遺跡」 『上代文化』 第29号 1959(昭和34)年
- 註7 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 『概報・月見野遺跡群』 1969(昭和44)年
- 註8 戸沢充則 「日本列島の形成と人類の登場」 『日本歴史大系 原始・古代』 第1巻 山川出版社 1984(昭和59)年
- 註9 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 「野川先土器時代の研究」 『第四紀研究』 第10巻第4号 1971(昭和46)年
- 註10 加藤晋平 「先土器時代の歴史性と地域性」 『郷土史研究講座 郷土史研究と考古学』 第1巻 朝倉書店 1970(昭和45)年
小林達雄 「アメリカ考古学における<セトルメント・アーケオロジー>成立の背景」 『信濃』 第23巻第2号 1971(昭和46)年
C.T.キーリー 「セトルメント・アーケオロジー―アメリカにおける最近の考古学研究の一趨勢」 『信濃』 第23巻第2号 1971(昭和46)年
- 註11 小田静夫・C.T.キーリー 『武蔵野公園遺跡』 野川遺跡調査会 1973(昭和48)年
- 註12 戸沢充則 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」 『考古学集刊』 第4号第1巻 1968(昭和43)年

- これは「インダストリー論」の実践でもあった(戸沢充則 「先土器時代における石器群研究の方法」
『信濃』 第17巻第4号 1965(昭和40)年)。
- 註13 戸沢充則・安蒜政雄・鈴木次郎・矢島國雄 『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡－第2次調査の記録』
所沢市教育委員会 1974(昭和49)年
- 註14 安蒜政雄・戸沢充則 「砂川遺跡」 『日本の旧石器文化 遺跡と遺物<上>』 第2巻 雄山閣 1975
(昭和50)年
安蒜政雄 「文化の復元をめざして」 『考古学ゼミナール 日本人類文化の起源』 六興出版
1988(昭和63)年
- 註15 鈴木忠司 『考古学シリーズ3 先土器時代の知識』 東京美術 1984(昭和59)年
鈴木忠司 「ムラと生活」 『考古学ゼミナール 日本人類文化の起源』 六興出版 1988(昭和63)年
- 註16 鈴木忠司・山下秀樹・保坂康男 『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』 平安博物館 1980(昭和55)
年
- 註17 鈴木忠司・山下秀樹・保坂康男 『富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書・A地点』 平安博物館
1982(昭和57)年
- 註18 鈴木忠司・山下秀樹・保坂康男 『静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』 平安博物館 1985(昭和
60)年
- 註19 その後、鈴木忠司は、集落と同じ場所に偶然あった狩猟用の陥し穴の可能性も考えている(鈴木忠司
「岩宿時代のイエとムラ」 『岩宿時代を知る』 笠懸野岩宿文化資料館・笠懸野町教育委員会 1995
(平成7)年)。
- 註20 大工原豊 「A T下位石器群の遺跡構造分析に関する一試論(1)－群馬県下のA T下位石器群の遺跡のあ
り方を中心として－」 『旧石器考古学』 第41号 1990(平成2)年
大工原豊 「A T下位石器群の遺跡構造分析に関する一試論(2)－群馬県下のA T下位石器群の遺跡のあ
り方を中心として－」 『旧石器考古学』 第42号 1991(平成3)年
勅使河原彰・須藤隆司 「立川ローム第Ⅸ層における生活空間の構成」 『東京都東久留米市下里本邑遺
跡調査報告書』 下里本邑遺跡調査会 1982(昭和57)年
須藤隆司 「先土器時代集落の成り立ち」 『信濃』 第43巻第4号 1991(平成3)年
- 註21 野口 淳 「遺跡における石器組成－石器の『製作－廃棄連鎖』の検討－」 『旧石器考古学』 第54
号 1997(昭和9)年
- 註22 安蒜政雄 「先土器時代の研究」 『日本考古学を学ぶ』 第1巻 有斐閣 1978(昭和53)年
- 註23 矢島國雄 「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」 『考古学研究』 第23巻第4号 1977
(昭和52)年
- 註24 安蒜政雄 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」 『駿台史学』 第86号 1992
(平成4)年
また、ここでは「石器原料の二重構成とその時差消費」が唱えられ、旧石器時代における原料消費の法則
性が見出されている。
- 註25 岡村道雄 「旧石器時代遺跡の基礎的理解について－廃棄と遺棄－」 『考古学ジャーナル』 第169号
1979(昭和54)年
安蒜政雄 「先土器時代人の生活空間－先土器時代のムラ－」 『日本村落史講座 景観Ⅰ 原始・古
代・中世』 日本村落史講座編集委員会 雄山閣 1990(平成2)年
西秋良宏 「旧石器時代における遺棄・廃棄行動の民族誌モデル」 『先史考古学論集』 第3集 1994
(平成6)年

- 註26 安蒜（註22文献）
- 註27 須藤（註20文献）
- 註28 近藤義郎 「先土器時代の集団構成」 『考古学研究』 第22巻第4号 1976(昭和51)年
 春成秀爾 「先土器・縄文の画期について(1)」 『考古学研究』 第22巻第4号 1976(昭和51)年
 小野 昭 「後期旧石器時代の集団関係」 『考古学研究』 第23巻第1号 1976(昭和51)年
- 註29 砂川遺跡A地点とF地点にはそれぞれ別集団が同時に居住していたという考えに対し、稲田は個別別資料を詳細に分析し、A地点とF地点をまたがる3例の接合例の剥離順序から、同一集団がF地点からA地点へと回帰したという仮説を提示した(稲田孝司 「旧石器時代の小集団について」 『考古学研究』 第24巻第2巻 1977(昭和52)年)。
- 註30 林謙作 「縄文時代の集落と領域」 『日本考古学を学ぶ』 第3巻 有斐閣 1979(昭和54)年
- 註31 水野正好 「縄文時代集落研究の基礎的操作」 『古代文化』 第2巻第3・4号 1969(昭和44)年
- 註32 縄文時代の集落研究においても、厳密に何軒の住居が一時期に存在し、どの施設を伴っていたかについては、議論の多いところである(勅使河原彰 「縄文時代集落をめぐる問題」 『歴史評論』 第2号 1989(平成元年)年)。
- 註33 戸沢充則 「先土器時代論」 『日本考古学を学ぶ』 第3巻 有斐閣 1979(昭和54)年
- 註34 戸沢充則 「狩猟・漁撈生活の繁栄と衰退」 『古代の日本 関東』 第7巻 角川書店 1970(昭和45)年
- 註35 安蒜政雄 「先土器時代人の生活空間―先土器時代のムラー」 『日本村落史講座 景観Ⅰ 原始・古代・中世』 日本村落史講座編集委員会 雄山閣 1990(平成2)年
- 註36 矢島（註23文献）
- 註37 山口卓也 「先土器時代における『移動』について」 『ヒストリア』 第101号 1983(昭和58)年
 山口卓也 「二上山を中心とした石材の獲得」 『瀬戸内技法とその時代 本編』 1994(平成6)年
- 註38 島田和高 「両面調整槍先形尖頭器の製作と原料消費の構成―槍先形尖頭器石器群における原料消費と遺跡の連関に関する一考察―」 『旧石器考古学』 第49号 1994(平成6)年
 野口 淳 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群―石器製作の工程配置と連鎖の体系―」 『旧石器考古学』 第51号 1995(平成7)年
 吉川耕太郎 「後期旧石器時代における石器原料の消費過程と遺跡のつながり―南関東地方立川ロームⅥ層段階を事例に―」 『旧石器考古学』 第56号 1998(平成10)年
 国武貞克 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別―行動論的理解に向けた分析法の試み―」 『考古学研究』 第46巻第3号 1999(平成11)年
- 註39 野口 淳 「石器文化の再検討―旧石器時代『居住構造』試論―」 『文学研究論集』 第5号 明治大学大学院 1996(平成8)年
- 註40 矢島國雄・野口 淳・門内政広・吉川耕太郎 「相模野Ⅱ期をめぐる諸問題(1)」 『綾瀬市史研究』 第4号 1997(平成9)年
 矢島國雄・野口 淳・門内政広・吉川耕太郎 「相模野Ⅱ期をめぐる諸問題(2)」 『綾瀬市史研究』 第5号 1998(平成10)年
- 註41 佐藤宏之 「日本旧石器時代研究と居住形態論―関東地方後期旧石器時代前半期から後半期への移行を中心として―」 藤本強編 『住の考古学』 同成社 1997(平成9)年
- 註42 栗島義明 「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」 『土曜考古』 第11号 1986(昭和61)年
- 註43 安蒜政雄 「関東地方の地域性と石器の製作」 『考古学ジャーナル』 第370号 1994(平成6)年
- 註44 本稿では、遺跡構造論的視点での研究の必要性を強調してきたが、当時の集団間や社会間の関係性に迫る

には、さらに「型式論」的視点も再評価し、あわせて論じられなければならないだろう(安蒜政雄 「先土器時代の石器と地域」 『岩波講座 日本考古学』 第5巻 岩波書店 1986(昭和61)年、絹川一徳 「瀬戸内におけるサヌカイト旧石器製作」 『考古学ジャーナル』 第315号 1990(平成2)年、須藤隆司 「ナイフ形石器の型式論(1)」 『旧石器考古学』 第42号 1991(平成3年)、田村 隆 「遠い山・黒い石ー武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察ー」 『先史考古学論集』 第2集 1992(平成4)年、など)。